



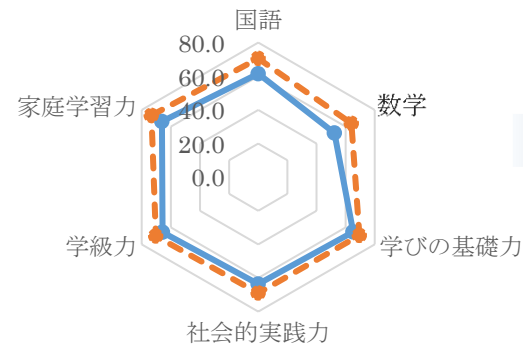
令和5年度 町学力検査（小学5年生，中学1・2年生）の結果と今後の展望

愛川町教育委員会

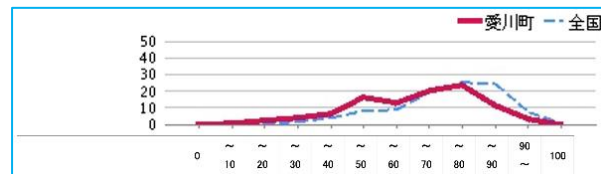
令和5年度に実施された小学5年生，中学1・2年生対象の町学力検査について，結果から見えてくる町の小・中学生の課題とその改善策について，学校の先生方とともに，分析した結果と今後の展望を報告します。※現在の中学2年生が小学5年時(2020年度)の町学力検査は，コロナ禍のため実施していません。

1 町内児童生徒の教科に関する調査結果

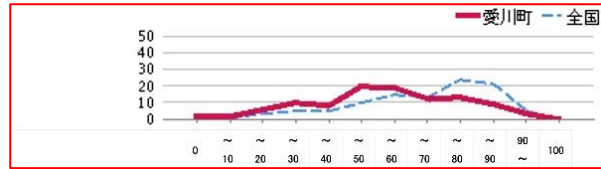
中学1年時（2022年調査）



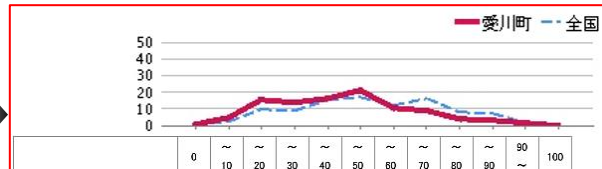
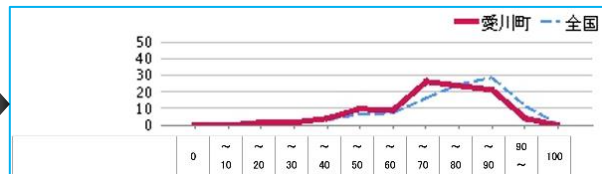
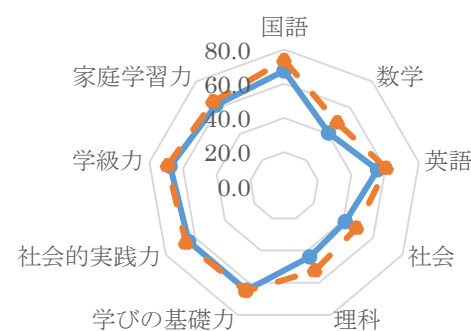
国語の正答率の分布



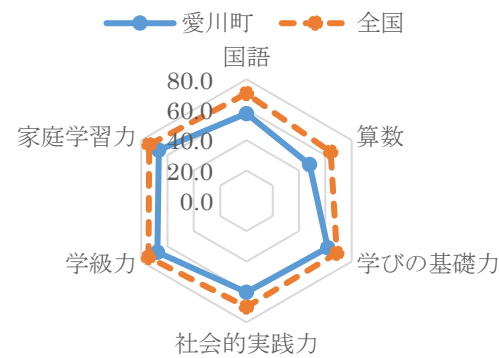
数学の正答率の分布



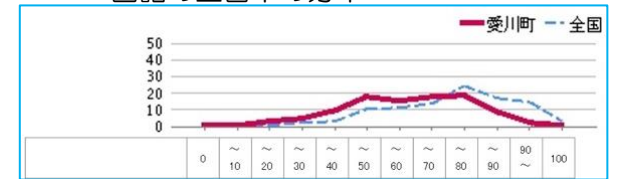
中学2年時(2023年調査)



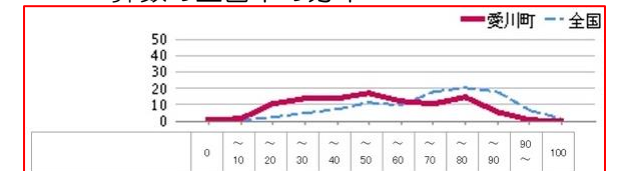
(2023年調査)



国語の正答率の分布



算数の正答率の分布



現小学5年生

現中学2年生は，中学1年時の正答率に比べ，国語・数学ともに伸びが見られます。意識調査の「家庭学習力（家庭学習の環境や習慣について）」「学びの基礎力（豊かな基礎体験・学びに向かう力）」などにおいても伸びが見られることから，小学校からの積み重ねで，学力と関係の深い基礎的な力が身につく，教科の力の伸びにつながっていると考えられます。

国語については，どの学年も「質問したりアドバイスし合ったりして思いや考えを伝え，先生や友だち，地域の人と進んで交流しようとしている」という項目において肯定的な回答の割合が比較的高くなっています。一方で，「事例や結論・その理由といった関係を考えながら読むことができるようにしている」という項目では，肯定的な回答の割合が全国の平均に比べて大きく下回っています。

内容を読み取ってまとめる問いについて，無回答率が高くなっていることから，説明的な文章の読み取りを諦めがちであると考えられます。社会科や理科などの教科の学習においても，論理的にじっくり考える力を育ていけるとよいと思われます。

算数・数学については，「比例・反比例」では多くの児童が未定着，「分数の計算」では定着度に差があるなど，単元によって特徴が見られたことから，各校で自校の児童生徒の傾向を把握して教科指導にあたることが重要であると考えられます。

2 町内児童生徒の意識に関する調査結果

下の表記は，学力層の上位層(25%)と下位層(25%)との差が大きい質問です。

多角的な考えを持とうとしながら，粘り強く学習に取り組んでいる児童生徒は，学力が高い傾向があります。小5の「本や新聞を読んでいる」については，問題内容をきちんと読み取る力につながっている可能性があります。中学生では，授業で得た知識を確実に自分のものにしようとする習慣が，学力の向上に役立っている様子が伺えます。

例「本や新聞を読んでいる。」に対して肯定的な回答をした割合は，学力の上位層では78.5%，下位層では40.0%。その差は38.5ポイント。

【小学5年生】

- ・本や新聞を読んでいる。
- ・必要なものをきちんとそろえてから，学習を始めている。
- ・自分と違う意見も尊重している。

【中学1年生】

- ・授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく，その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。
- ・わからないことはそのままにせず，わかるまで努力している。
- ・調べてわかったことをもとに，考えをまとめることができる。

【中学2年生】

- ・授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく，その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。
- ・調べたことを，パソコンを使ってまとめたり，発表したりすることができる。
- ・調べてわかったことをもとに，考えをまとめることができる。

上位層と下位層の差
38.5ポイント
32.3ポイント
24.6ポイント

37.2ポイント
35.8ポイント
35.7ポイント

40.6ポイント
33.7ポイント
29.7ポイント

3 今後の展望

各小中学校の自校の分析においても，「それぞれの理解度に合った課題への取組によって，基礎基本の定着を図る」「全体的に学習の定着が不十分な算数では，基本的な学習内容を改めて復習できるような授業構成を意識して単元計画を立てる」「学力検査結果とリンクさせて個別の課題に応じた問題に取り組む」など，単元や領域ごとの課題，学力層の到達度等に着眼した指導の方策が挙げられました。

また，夏に行われた教務主任の会議において，中学校区ごとに互いの結果を見つめることで，地域の児童生徒の傾向に気付き，自校での指導の方策の手がかりにつながる対話も生まれました。

町学力検査における自校の結果を各校で意識することが，よりよいカリキュラム・デザインの構築や児童生徒の実態に即した日常的な言葉かけにつながると考えられます。教育委員会としても，引き続き学校間の情報共有の場や，調査結果の活用方法等に関する情報提供の機会を設けていきます。

現中学2年生

現中学1年生